

氏名	山下 晃平
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第88号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	日本国際美術展（東京ビエンナーレ）再考 —戦後日本の美術史形成に関する研究—
審査委員	主査 教授 加須屋 明子 教授 三木 博 教授 高橋 悟 加治屋 健司（芸術資源研究センター） 上村 博（京都造形芸術大学教授）

論文の要旨

戦後日本の美術史は、画壇の再生からその後、前衛的な活動をクローズアップすることで、欧米のいわゆるモダニズムの終焉から制度としての「美術（芸術）」の拡大へという流れに呼応しつつ形成されてきた。しかしその一方で日本の美術界総体としての動き、芸術環境そのものを検証する試みはまだ充分になされてはいない。つまり日本の戦後美術史が、どのような価値判断と社会的背景との相関関係によって形成されていったのかという視点もまた、今後一層重要となる。そこで本研究は、戦後日本に興った大型美術展の構造変化に注目する。時代の動向との関わりが深い大型美術展を対象とすることで、日本の芸術環境の位相を捉える。特に1952年に誕生した戦後日本初の国際美術展「日本国際美術展（通称、東京ビエンナーレ）」を再考することから始め、さらに同時代の大型美術展の構造的な位相を検証することで、戦後日本美術史に関する新たな視座を提供することを狙いとする。

戦後日本の美術動向に関しては、瀬木慎一『戦後空白期の美術』（1996年）、針生一郎『戦後美術盛衰史』（1979年）、そして千葉成夫『現代美術逸脱史』（1986年）がある。しかし日本国際美術展については、部分的な説明に留まっており詳しく論じられてはいない。日本国際美術展に関する先行研究としては富井玲子の論考があるが、第10回日本国際美術展-「人間と物質」展に焦点を当てている。本研究は日本国際美術展を包括的に捉え、その総体を明らかにする。またこれまでの研究及び批評は、前衛的な作家・グループに注目し、その活動を海外とのインターフェイス、主として欧米の美術動向から分析する傾向が強い。日本の戦後美術史形成に関する要点に、そのような批評の価値基準、バイアスの問題がある。戦後日本美術の研究においては、まず画壇の再編より始まる美術界そのものの構造を把握し、その志向性、即ち組織・展示・作品に係る価値基準や批評のベクトルを検証する必要がある。

日本国際美術展は、毎日新聞社が主催となり 1952 年に第 1 回が開催され、1990 年の第 18 回で幕を閉じる。時代の動向とともに変遷を余儀なくされているが、まだその総体的な検証はなされていない。本研究では、図録及び言説資料に基づき、日本国際美術展の歴史的な役割、意義そして問題を捉える。そして日本国際美術展の変遷を踏まえた上で、同じ時代を並走した他の大型美術展、姉妹展である「現代日本美術展」や「読売アンデパンダン展」、そして 60 年代以降に隆盛する野外での彫刻展や美術展との比較研究を進め、大型美術展の構造的な位相とその文脈を明らかにする。またこの大型美術展の検証により浮かび上がる、近代以降続く西洋に起因する制度としての「美術（芸術）」受容と日本の文化的コンテクストとの問題に注目する。明治期には、国粋主義や美術教育、博覧会においてこの問題は表出してきたが、戦後は大型美術展を舞台に再びこの問題が表出している。

日本国際美術展の構造及び批評に係る言説史的アプローチの結果、日本国際美術展という組織体は、画壇からの脱却と前衛への移行が見出されるものの、その選抜や展示形式、そして批評の価値基準において、「美術（芸術）」の制度性、即ち「表現」における形式や近代的ジャンル区分に意識的・無意識的に牽引され、前衛における内在的な保守性、また国内画壇によるヒエラルキーの問題を孕む。また批評においては、50 年代の「民族性」の議論を始め、60 年代にかけての「国際性」「同時性」に係る重要な批評の場を形成するが、それは「日本の独自性」に対する探求を促進するものの、批評に内在する欧米の価値基準、西洋に起因する「美術（芸術）」概念への志向が遮蔽されつつ作用するため、60 年代末に頻出する「国際的同時性」の文脈において、日本の独自性を十分に発信し得ない。この問題は、同時代を並走した他の大型美術展との構造比較によって、一層明らかとなる。

また 60 年代以降には「美術館から野外へ」というもう一つの志向が生じるが、野外美術展の構造及び批評のベクトルには、日本国際美術展と同様の問題を引き継ぎつつも、一方で「美術（芸術）」からの逸脱性の問題が表出する。この「制度」受容とその牽引力あるいは逸脱の問題は、日本文化論や日本思想史において、戦前戦後に抛らず常に議論されているが、戦後の「美術（芸術）」領域においてもまた密接に関わっている。90 年代以降の国際美術展や大型美術展においては、「国際性」の文脈に「地域性」を内包することによって、「展示」を軸としながらもその周縁に人と人が行き交うプラットフォーム構造を持つ形へと、大型美術展そのものの位相変容が起きている。

このように本研究は、「日本国際美術展」の再考とそれを補完する大型美術展の構造変化を検証することによって、「日本」という特定の場における美術界の構造とその歴史性を明らかにしている。この視点は、従来の前衛的な作家・グループに焦点を当ててきた戦後日本の美術史形成に対して、新たな視座をもたらす。歴史はその長い時間によって、重大な事実や価値体系を覆い隠す力がある。本研究を通して、近代以降続く制度としての「美術（芸術）」の受容と、脈々と続く日本独自の文化的価値体系とが、美術界の構造・批評の価値基準において密接な関わりにあることを捉えた。この状況こそが、日本という場であり、戦後日本の美術史形成に関わる。本研究は、日本国際美術展をそのための出発点として位置づけ、その総体を明らかにしている。

審査結果の要旨

本論文は、「日本国祭美術展（通称、東京ビエンナーレ）」に関わる言説分析を軸に、戦後日本に興った大型美術展の構造変化を探り、「戦後」「日本」「美術」の概念の連続性、断絶、転移の系と位相を精緻に論述し、戦後日本美術史に関する新たな視座を提供するものである。まず画壇の再編より始まる美術界そのものの構造の把握が目指され、特に1952年に誕生した戦後日本初の国際美術展である「日本国際美術展」をきわめて緻密に分析、再考し、さらに同時代の大型美術展の構造的な位相が検証される。いわゆるアヴァンギャルド（前衛）の理念に則った作品分析、様式分析ではなく、そのような作品の変化が生じる契機や批評の推移に焦点を当て、そしてその価値基準、即ちアートワールドが形成される諸条件、美術界総体としての志向性に注目し、特定のグループや作家の作品あるいは様式研究ではなく、芸術と社会環境、つまり「日本」という特定の場における美術界の構造とその歴史性が考察の対象となり、「日本国際美術展」の「言説形成」に焦点を当てることで、そこで編成されてきた対象や価値概念の変遷、例えば「国際性」「同時性」「固有性」などを解明する点に本論文の独自性がある。

論文の構成について述べれば、まず第一章では、日本国際美術展の概略についてまとめ、続く第二章では先行研究の動向について触れ、第三章においては日本国際美術展の変遷を詳細に分析しながら、組織・展示・選抜など国際美術展としての構造把握からその変遷の経緯へ、そして言説分析に基づく志向性・価値基準の把握、すなわち批評言語において「民族性」から「国際的同時性」へと移行する推移を明らかにされた。海外の主要な国際美術展における日本の海外出品の状況と姉妹展である「現代日本美術展」を比較検討し、日本国際美術展が国別展示の構造を取り、画壇に収まらず日本の美術を世界へ発信しようという機運が美術界に一気に高まったことが示された。同時に、海外に対峙する場が生まれたことにより、世界に対する日本という構造が作家、美術評論家双方の意識に芽生え、国際展を舞台として美術をめぐる日本の文化的なコンテクスト、すなわち当時の言葉を借りれば「民族性」に関する批評が展開されたことが示された。第四章では制度としての美術と日本の独自性に注目しながら、同時代を並走していた「読売アンデパンダン展」にも触れつつ、価値基準そのものの成立要件、日本の美術界全体としての志向性・批評のベクトルの問題へとスライドし、本論文の目指す「戦後日本の美術史形成に関する」要点を捉えることに力点を移動させている。第五章では芸術環境の変化を示す現象としての野外美術展の展開に言及し、最後の第6章では、通奏低音とした日本の文化的コンテクストに対する問題意識から、大型美術展の位相変容に言及するために、「日本国際美術展」終焉後の、新旧での大型美術展の構造比較を試論として展開している。日本国際美術展は、「美術（芸術）に対する保守性」と同時に「日本固有の文脈の探求」という相矛盾する「ねじれ」を抱えながらつき進んでいく。その結果、日本の文化的コンテクストの問題、つまり「日本の独自性」の問題は、「表現」という西歐的枠組みからの逸脱性を孕んだ野外での美術展へと位相変容を起していることが見出された。80年代の日本の美術界は、高い質を有するが、制度としての「美術」という保守性を内包する軸としての「展示」と、一方で野外での作家の創造行為に表出する、その「美術」からの「逸脱」という二層構造を有して展開することを明らかにした。

以上、本論文において明らかにされたのは、国内外の動向とも相互に作用しながら変容してゆく

価値基準と同時に、戦前、戦後を通じて維持されつづけた日本美術の制度的環境と体制であった。この二重構造をもった位相を山下氏は「日本固有」の文脈と位置づける。「日本固有の文脈」について、美術という場だけでなく文脈を形成する背後に潜むメタレベルの構造について、丸山真男や柄谷行人など思想家による分析を押さえた点も評価できる。こうした試みは、近代以降続く、西洋に起因する制度としての「美術（芸術）」受容と日本の文化的コンテキストとの問題ともつながる。

制度・構造・位相・民族性・日本固有の文脈など、アプローチの難しい論点が取り上げられているが、山下氏はあくまで当時の言説のコンテキストを丁寧に読み解きながら、精緻に分析を進め、「民族性」といった用語についても、文化論のコンテキストに即しながら、安易な実体化が慎重に避けられており、その手法は評価できる。その結果として、ともすれば「構造論的な」考察につきまとう抽象的で曖昧な分析に陥ることなく、論点が拡散することなく、具体性を損なうことなしに現象が掬い上げられていることは特筆に値する。このことは、論考末尾に付されている広範にわたる豊富な資料の渉猟、および精緻な検証作業に基づく周到な註釈による肉付けによって示されている。

すでに述べたように、山下氏の方法論は、従来の作家論、作品や様式展開ではなく、「日本国際美術展」という特定の展覧会を軸にして、日本という場における言説の編成を明らかにする試みである。そしてまた、これは「日本という場」の分析だけでなく、ヨーロッパ、南米、東アジアなどにおいて大国の「周辺」として位置づけられる国家の多くが抱えてきた近代以降の美術史研究においても応用可能であろう。

以上のことから、本論文での試みは有意義で独創的なものであり、その考察の範囲の大きさと分析の精緻さが両立できており、博士論文として十分な成果を挙げているものと評価できる。